



---

君がここに  
いる

みなみ

---

俺は月嶋 一葉 つきしまわかずは  
親の仕事の都合でガキの頃この町に引っ越してきた  
引っ越しの挨拶に隣の家に行ったとき  
俺はすげー可愛い女の子をみつけ  
目が釘づけになってしまった

「一葉ご挨拶は？」

俺は恥ずかしくて、母親の後ろに隠れて下を向いていた

「ごめんなさいね 人見知りが激しくて・・・」

「綾菜 あやな ご挨拶は？」

(「綾菜ちゃんっていうのかあ～ 可愛いなあ～」)

母親の後ろに隠れ、俺を微笑みながらみている

「すみません・・・こら綾菜ご挨拶は？」

「ねえ～お母さん 私ね一葉君と友達になりたい」

そうやって綾菜は俺に手を振った

俺は母親に抱きつき綾菜をみている

「一葉君 私綾菜夕凧綾菜 ゆうなぎよろしくね」

「話しかけてくんなっ・・・」

おまえなんかと・・・友達にならない・・・あっけいけ・・・」

「なんてことこの綾菜ちゃんに謝りなさい」

「謝らない・・・あいつ嫌いだ・・・大嫌いだ・・・」

(「何言ってるんだ俺 あんなこと言ったら嫌われるだろうが・・・」)

「ごめんね綾菜ちゃん」

と母親は言うのと慌てて俺をぐいぐい引っ張って家に入った

俺は玄関から顔を出し綾菜をみている

綾菜が笑顔で手を振っていたが

「眼鏡ブスこっちみんなっ」

とってドアを閉めてしまった

(「最悪だ また言っちゃたよお～ 嫌われたな 絶対嫌われたな・・・」)

それから毎日学校と一緒に登校することになった  
相変わらず俺はそっけない態度をとっていたが  
いつも綾菜は笑顔で接してくれていた

「おはよお～一葉あ～」

「おまえ誰だよ？何で俺に付きまとう」

「私は一葉の幼馴染の綾菜 一葉の家の隣に住んでて  
学校が一緒だから行く方向が一緒なの わかった？」

「おまえさあ～毎日同じこと言ってあきない？」

「一葉が毎日同じこと聞いてくるからじゃない  
一葉ってさあ～ゲームキャラの名前は完璧に憶えられるくせに  
リアルだとすぐ忘れちゃうよね」

「興味ないから」

綾菜は歩くたびに足を止めて道端に座りこんでいたりするので  
いつも学校になかなかたどり着けない

「一葉あ～ 蒲公英が咲いてるよ」

「蒲公英なんていいから行くぞ」

「一葉あ～」

「今度はなんだよ」

「猫がいたよ」

「猫なんていいから行くぞ」

おまえと一緒にちんたら歩いてたら遅刻すんだよ」

「ちょっと一葉あ～待ってよお～待ってたらあ～」

綾菜が話しかけてくれるのが嬉しくて仕方なかった

本当はもっと綾菜と違う話がしたかった・・・

したかったんだけど・・・

「ただいまあ」

「おかえり」

「冬真とうま きてたんだあ」

「うん」

「お菓子あるよ 食べる？」

「うん」

「今日遠足に行ったの それでね」

「このクッキー綾菜が焼いたのか？」

「うん お母さんが遠足のおやつ買ってくるって言ったのに  
忘れちゃったから・・・」

「買いに行けばよかっただろ」

「面倒だったから・・・」

「食っていい？」

「うん」

「サンキュー おお～い 夕凧のクッキー美味いぞお～  
何か交換するならくれるってよお～」

あっというまにクッキーはなくなり

帽子の中に駄菓子がたくさん入っていた

「私の分なくなっちゃったじゃない・・・」

「また作ったらいいだろ 作ったらまた食わせてよ」

「うん」

「これやるよ さっき食ったから交換な」

「ありがとう」

「今度は遠足のおやつ一緒に買いに行こうな  
またおばさん買い忘れるかもしれないからな」

「うん」

「ここプラネタリウムがあるんだってよ 観に行かない？」

「うん 行く」

「てっことがあったの」

「なにそれ 惚気話？」

「違うわよ 話ちゃんと聞いてた？」

「聞いてたよ」

「だったら何で惚気話とか言うのよ」

「そう聞こえたから」

「もお～ませた事言ってんじゃないわよ 10年早いから」

中学に入ってから  
校庭のクスノキの下に座ってゲームをするのがスキになった  
ゲームをするのも目的ではあったが  
昼休みになると弁当を持って  
綾菜がこの場所に必ず現れるので  
待っていたっていうのも事実だったりする

「ここ私の場所なんだけどお～ のいてくれるう～」  
と話しかけてきて  
「ここは俺の場所でもあるんですけど・・・」  
「じゃあさあ～この線からこっちにこないでくれる？  
お弁当まずくなるからさあ～」  
「行かねえ～よ・・・」  
しばらく沈黙がつづき  
「一葉お弁当持っていないみたいだからわけてあげる」  
「食ったからいい・・・」  
「早弁ってやつ？はいっ・・・これ一葉の分・・・」  
「手が汚れるんですけど・・・」  
「文句言うならかえしてくれる？・・・」  
「じゃあかえす・・・」  
「全部食べてからかえさないでよねえ～・・・」  
「美味かった・・・」

なんて会話をするのが定番で  
弁当を食べ終わると  
いつも綾菜のおしゃべりに付き合わされていた  
うるさくて、ゲームに集中できずイライラしていたが  
毎日弁当を持ってきてくれるので、  
文句も言えなかった

「あんたなんなんすか？さっきから人の事じろじろ見てるっしょ」

「あっ・・・ごめんなさい・・・」

「あんたもあいつらと同じ目的なんすか？」

「え？」

「外にいるあいつらっす」

「すみません・・・邪魔だったら帰ります・・・」

「いいすよ 邪魔じゃないっすよ

あいつらみたいにぎゃあぎゃあ騒いだりしないすから」

「毎日くるんですか？」

「うん うざいんすよね あいつら」

「あの・・・」

「なんすか？」

「私も隣で練習していいですか？」

「え？いいすよ あんたもバスケするんすか？」

「うん あまり上手くないですけど・・・」

ダンダーンというボールの音と

キュッキュツというシューズの音が体育館に響いている

「凄いあの子 月嶋先輩の練習についていってる」

体育館の外は静まり返り

2人の練習を食い入るように眺めている

「あんた凄いいっすよ 僕の練習についてこれるなんて」

「小学校の頃この町に住んでたんです

近所の空き地でバスケをしてる男の子とおじさんがいて

そのおじさんに教えてもらったんです」

「そのバスケしてたの僕っす

蒼葉 あおば だったすよね あんたの名前」

「うん」

「練習もうちょっと付き合ってもらえないっすか？」

「うん いいよ」

ふたたびダンダーンというボールの音と

キュッキュツというシューズの音が体育館に響いている

しばらくすると二人はボールを抱えたまま座り込んでしまった

「家どっこっすか？送るっす 付き合ってもらったすから」

「一翔 いちか くん家の向かい」

「帰るっすよ」

「うん」

「またその話かよ・・・ その話は何回も聞いたって・・・  
俺は父さんと母さんの昔の話なんか聞きたくないから・・・」

「一葉どこいくの？」

「寝るんだよ・・・」

と部屋へ向かったが俺は振り返って

「あのさ・・・父さん・・・母さん・・・結婚記念日おめでとう・・・」

と伝えると父さんが

「一葉おまえもバスケやるか？」

と話しかけてきた

「きついからやりたくない・・・」

「そうか・・・残念だ・・・」

「ごめん・・・」

父さんの気持ちに応えられないことがはがゆく  
惨めな気持ちになった

高校に入って俺にもようやく友達ができた  
涼風春真 すずかぜはるま といって  
綾菜の双子の兄で、俺が引っ越してくるちょっとまえに  
親が離婚したらしく、綾菜は母親に涼風は弟の冬真  
と父親に引き取られたらしい

涼風はいつも俺に、エロアニメのDVDを押し付けてくる・・・  
オレ的には興味のないものが多く  
いつも仕方なくしぶしぶ観てやっている・・・

(「なんだよこのエロアニメ！・・・つまんねえ・・・  
兄が妹を強姦するって設定がキモい・・・キモすぎる・・・  
文句言ってやる」)

携帯電話を取り、涼風に電話した

「おまえの貸してくれたDVD  
つまらねえんだよ！！」

「月嶋には刺激が強すぎたか？」

「うぜえ・・・マジうぜえ・・・」

「じゃあ 他の貸してやるよ」

「お願いされても借りねえよ・・・なんで妹系ばっかなんだよ・・・  
シスコンか？・・・シスコンなのか？」

「だったらどうする？」

「じゃあおまえは綾菜をそんな目で見れるのか？」

「見れねえよ！」

「おまえ 俺のことからかかってるだろ？」

「月嶋はからかうと面白いからな」

「うぜえ・・・マジうぜえ・・・ああ・・・もう切る・・・」

「じゃあ お疲れえ～

あっ月嶋 いつも綾菜の面倒 見てくれてサンキューな！」

そう言って涼風は一方的に電話を切った

涼風はいつも強引で、振り回されてばかりだけど

涼風のことは嫌いじゃない

むしろこれからも、いい友達でいれたらいいと思っている

綾菜が通学の電車の中で痴漢にあつて  
泣きながら俺の腕にしがみついてきた  
隣にいた涼風が

「おっさん次の駅で降りてもらどうぞ！」

と言って痴漢の腕をつかんだ

痴漢が逃げようとしたので

さらに強く腕をつかんで動きを封じた

次の駅で降り涼風は駅長室に、俺は綾菜とベンチに座って

恐怖でふるぶると震える綾菜の体を

抱きしめながら髪を撫でた

「ごめんな綾菜」

「何で一葉が謝るの？」

「俺 綾菜を守ってやれなかったから・・・」

「一葉が傍にいてくれてる・・・それだけで十分だよ・・・」

俺はふたたび綾菜の髪を撫でながら

「体大丈夫？」

聞くのがで精一杯だった

「うん 体の方はなんともないけど・・・精神的に辛い・・・」

次第に綾菜の体の震えがおさまっていくのを俺は感じた

綾菜は

「一葉・・・ありがとう」

とつぶやき俺を強く抱き寄せた

「礼を言う相手が違うだろっ！

礼なら涼風に言っておけ 俺は何もしていない」

「うん」

綾菜のこと守れないなんてカッコ悪いよなあ～・・・俺・・・

涼風みたいに俺も綾菜を守ってやれたら・・・

カッコいいのに・・・

家庭科の刺繍が出来ない

何をどうしていいのかすら分からない

悩んでいたら担任の満道 まどう 先生が

「涼風くん 2組の汐海恋華 しおみれんか さんに  
刺繍教えてもらたらどうかな？ 汐海さんの刺繍凄く素敵だから」  
と紹介してくれた

俺は別に刺繍を教えてほしかったわけではないのだが

2組の汐海さんに会いに行った

「満道先生から刺繍教えてもらえって言われて来たんだけど・・・」

汐海さんは刺繍をしながら

「刺繍は好きだけど教えるのって苦手だな・・・」

とつぶやいた

その日から汐海さんと刺繍をすることになった

せっかく教えてもらってらっているのに上手く縫えないので

最近ではいら立ちを覚えてきている

汐海さんの刺繍は

気球にネコとウサギとクマが乗っている可愛い刺繍で

凄く丁寧に縫われていて仕事が早いので

もうすぐ仕上がってしまいそうだ

もう少しだけ仕上がらないでほしい・・・汐海さんと一緒にいたい

汐海さんは俺の事どう思っているんだろう？

(「夢？小学校の時の夢？

普段は夢なんか観ることはないに・・・

観ても忘れてるだけかもしれねえ～けど・・・」)

目覚ましを手に取り時間を確かめる

「やべえ遅刻するっ」

慌てて準備をととのえ学校に走った

なんとか遅刻はまぬがれた

チャイムが鳴り先生が教室に入ってきて転校生を紹介する

「ご両親の仕事の都合で私立天空 のあ 学園高等学校から

この高校に編入してこられました 汐海恋華さんです

汐海さんの席は涼風くんの横が空いてるのでそこに座ってください」

軽く会釈をして汐海さんは席について

「おひさしぶり 涼風くん」

と微笑んだ

冬真がめずらしく綾菜の家に遊びに来ていたが  
玄関の前をうろうろしてなかなか入ろうとしないので  
心配になって俺は冬真に話しかけてみることにした

「どうした?!」

目にいっぱい涙をためながら

「兄ちゃんに・・・怒られた・・・兄ちゃんは僕の事嫌いなんだっ・・・」  
とつぶやいた

「嫌いなんかじゃねえ～よ 冬真のことを思ってるから叱るんだぞ  
冬真が嫌いなら叱ったりしない

冬真は涼風が怒ったって言ったよなあ

怒るってのはな 自分の感情を爆発させることで

叱るってのは相手のためを思って注意することなんだぞ

冬真は何か悪いことしたんじゃないのか?

それだったらすぐ謝れば 涼風は許してくれただろ

冬真がしたんじゃないなら 言わなかった冬真も悪いだろ

冬真が言おうとしたのに

聞こうとしなかったのなら涼風も悪いけどな

もう一回言うぞ

怒るってのはな 自分の感情を爆発させることで

叱るってのは相手のためを思って注意することだからな

じゃあ涼風がしたのはどっちだ?」

「叱る」

俺は冬真の髪を撫でながら

「冬真は賢いな 綾菜に甘えたいだけ甘えたら

うちに帰って涼風に謝るんだぞ 約束だからな

涼風が悪いなら俺が叱っとくから」

「兄ちゃんは悪くない・・・俺が悪いんだ・・・」

「そっか じゃ綾菜のところに行って来い」

「かずにい・・・姉ちゃんのこと譲ってやってもいいぞ」

「じゃあ 譲ってもらおうけど あとでかえせって言うなよな  
これも約束だからな」

「うん・・・かずにい・・・俺が姉ちゃんに甘えに来たの

兄ちゃんには絶対内緒だからな 約束だからな」

「わかってるって」

「かずにい・・・サンキューな!」

「早くいけて」

いつもは一葉って俺のことを呼び捨てにして  
蹴ってくる冬真が  
かずにいなんて呼んでくれたことがちょっと嬉しかった

「今日転校生が来るんだって」

「そうなんだあ～ 男かな？女かな？」

チャイムが鳴りあわただしく生徒たちが席につく

先生が教室に入ってきて転校生を紹介する

「雪咲凜 ゆきさきりん さんです 仲良くしてあげてください

ええ～雪咲さんの席は涼風くんの横が空いていますね

そこに座ってください」

何も言わずに雪咲さんは席についた

授業が終わると男子が雪咲さんの席にむらがって

からかい始めた

「うるさいんですけど・・・ 俺今漫画描いてるんですけど・・・

集中して描きたいんですけど・・・」

と俺が言うと

「涼風なまいきだぞ」

とって全員逃げ去っていった

「ありがとう」

「あんたのために言ったんじゃないから・・・

うるさいから うるさいって言うただけだから・・・

勘違いするなよな・・・」

「そうなんだあ～ 漫画描けるんだあ～凄いねえ～」

「凄くない 俺漫画家になるから

なりたいんじゃなく 絶対なるから」

「凄いね なるって言えるものがあるなんて

私にはないなあ～ そのまえに何が出来るのか

それすら分からないから・・・」

「探せばいい 必ずなにかある 絶対ある

だから探そう 俺も手伝うから」

「うん」

チャイムが鳴り授業が始まる

(『国語かあ～・・・読まされるから嫌なんだよなあ～

どうかあたりませんように・・・』)

「次のとこ雪咲さん読んでください」

読み終わると雪咲さんは

ため息をつきながら席についた

「みつけたよ あんたに出来ること 朗読凄くよかった

声も声優みたいで凄く綺麗だと思う」

「声？私の声が？初めて言われた」

「涼風くん 雪咲さん 喋ってないで授業に集中しなさい」

「叱られたちゃね 涼風くん」

「冬真でいいから・・・」

「うん」

「話しかけんなよ・・・ また叱られるだろうが・・・」

## 君がここにいる

<http://p.booklog.jp/book/47021>

著者：みなみ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/minamimoriyama/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/47021>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/47021>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.